『新釈 現代文』

高田瑞穂著／筑摩書房

「新釈 現代文」高田瑞穂著、この本を知っている人は昭和20年代か30年代生まれの方だと思います。知っている人にとっては、10代の終わりごろに一生懸命読み込んだ、しかしその後長い間読み返していない、思い出深い書ではないでしょうか。なぜなら、この本は大学受験の参考書だからです。国語の現代文の読解の方法論を説いた有名な参考書で、緑の表紙がついたハードカバーの薄手の本でした。初版は1959年とのことで、私が手にした1980年ごろにはすでに古典的名著と呼ばれる存在になっていました。実は確かに読んだのですが、当時の私には難しすぎて内容を咀嚼できず、一読して目から鱗が落ちる、ということはありませんでした。

さて今回本書を紹介するのは、本書が2009年に文庫本で復刊されたからです。受験参考書という特殊な書でありながら、しかも50年を経て復刊されるとは異例のことだと思います。本書の帯には「伝説の参考書、待望の復刊！」とあります。書店で偶然見つけて、半分は話のネタに、半分はもう一度読み返してみたいという気持ちから買い求めました。しかし、30年ぶりに読んでみたら、やはり難しかった。「私も仕事柄ずいぶんと文章の読み書きを重ねてきたので、今ならこの本の内容がすいすいと入ってくるのではないか」という期待は簡単に崩れました。負け惜しみではありませんが、今の高校生、大学生が読んでもきつと難しいと感じると思います。昔の受験生は、大学受験という目的が限定された状況下においても、高尚な学問を修めていたことを確信すると同時に、謙虚に勉強することが今もって私に必要であることを再認識しました。

私のように国語の苦手な受験生にとって、現代文は、普段から日本語の文章は読んでいるはずなのに、入試問題となるとやたら難しく感じ、かといって勉強の仕方もわからないという困ったものでした。本書は長い間多くの受験生の定番であった数少ない現代文の参考書です。そこには、入試現代文の読解の方法として著者が言うところの「たった一つのこと」が追及されています。それは、論理の展開を追って正確に追跡して論旨を把握することです。今になって思うと、当然ながらこれは入試現代文に限ったことではなく、論文やレポートなど人間の知的活動に関する公的表現についていえることでしょし、文章を書く際にも留意しなければならないことでしょう。復刻版の解説によると、「さらに本書は『人間主

義・合理主義・人格主義』を柱とする近代思想の啓蒙書でもある」とのことです。もともと、そこまでの深い内容は、恥ずかしながら私は受験生時代も今もよく理解していません。しかし、本書が復刊されたのは、昔の読者が受験生時代を懐かしむためだけではなく、また単に受験参考書としてでもなく、あらためて現代に読まれる価値があるからだと理解しています。今の受験生や大学生にも読んでもらい、ぜひ感想を伺いたいと思います。

執筆者紹介

下村 匠

環境・建設系准教授。専門領域は、コンクリート材料、コンクリート構造。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『新釈現代文』 高田瑞穂著 筑摩書房 2009年 1,155円

[ブックガイド目次へ](#)